

## ホスピタルアート、その成果報告

車 谷 哲 明・金 田 恵美子

### 1. はじめに

本報告は、大阪芸術大学の美術学科と初等芸術教育学科の一部の学生及び教員とが、南大阪地域（以後、地域と記述）の2件の病院において実施したホスピタルアートへの取り組みを報告するものである。

### 2. ホスピタルアートとは

ホスピタルアート（hospital art）とは、アートの力をもって、病院などの医療環境をより快適な癒しの空間とする試みである。欧米ではすでに20年近くの歴史があり、その活動が盛んに行われ、イギリスやアメリカ、カナダ、オーストリア等からの報告がある。しかし、日本でのホスピタルアート活動の歴史が浅く、その成果報告も少ない。

そのような医療・福祉の現場で行われる芸術活動は「Art and Health」とも呼ばれ、多くの場合、色や形、音などがヒトの五感に働きかけ、生きることへの前向きな姿勢を引き出すことを目的とし、また、病院内で展開される芸術活動も、美術だけでなくデザインや音楽、パフォーマンスなどと、その創造の領域を拡大しつつある。また、作業療法士が中心となって行われる患者へのリハビリテーションや日常生活の援助活動にもホスピタルアートが含まれる。

本報告は、地域の2件の病院において、そのような実践的な試みに参加した本学の学生（初等芸術教育学科・美術学科・大学院生）の活動を記録したものである。

尚、2件のいずれの取り組みも、壁画を専門とする制作集団ではなく、教員と学生が共同で実施したものであることを申し添えておく。

### 3. 実施への経緯と依頼病院の概要について

2010年10月に堺市より本学にホスピタルアート制作の依頼があり、この発展的な取り組みに挑んだのは、当時の初等芸術教育学科末延國康教授であった。

### 3－1. 「堺市民病院」(現清恵会病院)について

1 件目の依頼は、当時、大阪府堺市堺区南安井町にあった堺市立病院である。同院の歴史は古く、1923 年に同市堺区宿院町東に「堺市立公民病院」として開院され、第 2 次大戦を経て、1951 年に「堺市立堺市民病院」と改称し、1996 年に同地に移転し<sup>1</sup>、堺市民からは「市民病院」と通称されていた。2015 年に同院の西区家原寺町への移転によって、旧院施設は現在、清恵会病院に運営されている。

本学に堺市から依頼があったのは 2010 年 12 月であった。その内容は、「小児病棟の壁面をアートで飾り、子どもたちが過ごしやすい環境にしたい」というものであった。本学としては初めてのホスピタルアートへの取り組みであり、その活動に教員 2 名(末延國康教授・金田恵美子准教授)が指導者となり、参加学生を公募や企画・制作への助言、現地での設置・補正などを担当した。制作期間は短く、2011 年 1 月から取り組み始め、春休みを挟んだ 4 カ月の間に計画・制作・設置と進め、5 月に完了させた。

### 3－2. 医療法人正雅会 「辻本病院」について

2 件目の依頼は、大阪府大阪狭山市にある「医療法人正雅会 辻本病院」(以後、辻本病院と表記)である。1973 年に開院した同院は、外科や内科、救急医療など 11 科目を持つ総合病院であり、地域密着の医療を提供する病院として位置づけられている。

本学への依頼の起因は、同院の常務・吉本悟史氏が欧米におけるホスピタルアートの存在とその取り組みを知ったことにある。そして、同院からの依頼を受けて、本学がホスピタルアート制作を着手したのが 2015 年 4 月であり、2 年後の 2017 年 3 月に完了した。

作業を進行させるために、まず、医療職員(看護師・医療事務等の職員)と本学教員 3 名(末延國康・車谷哲明両教授、金田恵美子准教授)とが事前に協議を行い、同院の要望を把握した。そして、実地調査と同院から提供された平面図(図 1)を基にした展示計画のレイアウトから作業を開始した。

また、当初は壁面に絵画制作を行うだけの計画であったが、その描画作業の完成後に計画が膨らみ、院内の各階廊下にパネル画を設置することや、院内に常設展示施設として「わたしの美術館」を新設し、さらには同美術館内で定期講座の開講へと発展した。

## 4. 計画から完成までのプロセス

すでに記述したように共に制作期間は短く、堺市民病院は 2011 年 1 月～5 月までの 4 カ月間、また辻本病院は 2015 年 4 月～2017 年 3 月までの約 2 年間に計画・制作・設置を完了させたが、院内における描画作業は 2016 年 1 月末にスタートし、集中的に行った。

#### 4-1. 堺市立病院のプロセス

まず、指導教員からホスピタルアート制作の意義と目的、また設置場所となる堺市立病院の諸処のスペース、さらに、それらの企画・構想は学生主体で行うことなどの説明会（写真1）を開いた。その後、参加学生が各自それぞれの構想を練ったものを持ち寄って発表し、それらを統合させながら壁画全体のテーマのイメージ化を図っていった（写真2）。

その結果、制作テーマは「元樹（げんき）」となった。壁面に大きな木を1本描き、その大きな木を中心に、「海」「地上」「宇宙」へと繋がるさまざまな世界を描き出し、子供たちの「夢や創造」が広がるような企画案が作られていった（写真3）。制作方法は、絵画・コラージュ・ステンドグラスなどの手法を用いることになった。

制作作業へ参加者は、副手2名と初等芸術教育学科を中心に美術学科デザイン学科の1年生から3年生までの、総勢47名であった。春期休暇に入った1月から大学構内の一角を利用して、纏まった「下図」を分割し、各自の担当箇所を描画した。5月にそれら部分図を合体させる作業を行うとともに、展示場となる病院内での補筆・修正作業となった（写真4、5、6）。



写真1) 説明会（於：大阪芸術大学）  
指導教員による参加学生への説明会



写真2) コンセプトづくり（於：大阪芸術大学）  
参加した学生各自が制作テーマを試案する光景

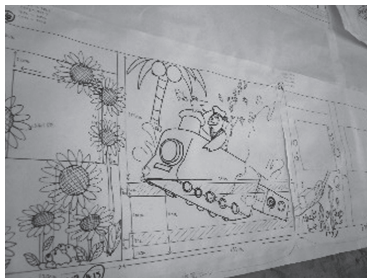


写真3) 壁画「元樹」の下図  
コンセプトを基に学生各自の構想を展開



写真4) 壁画部分の制作（於：大阪芸術大学）  
大きな下図を分割し、各々の担当部分の描画作業



写真5) 壁画制作  
大学内における壁画制作



写真6) 壁画設置と加筆作業  
病院内における補筆および加筆



写真7) 小児科病棟内  
通常は閉鎖されているガラス戸をステンドグラス風に仕上げる



写真8) 小児科病棟入り口  
完成後に末延元教授と学生でスナップ

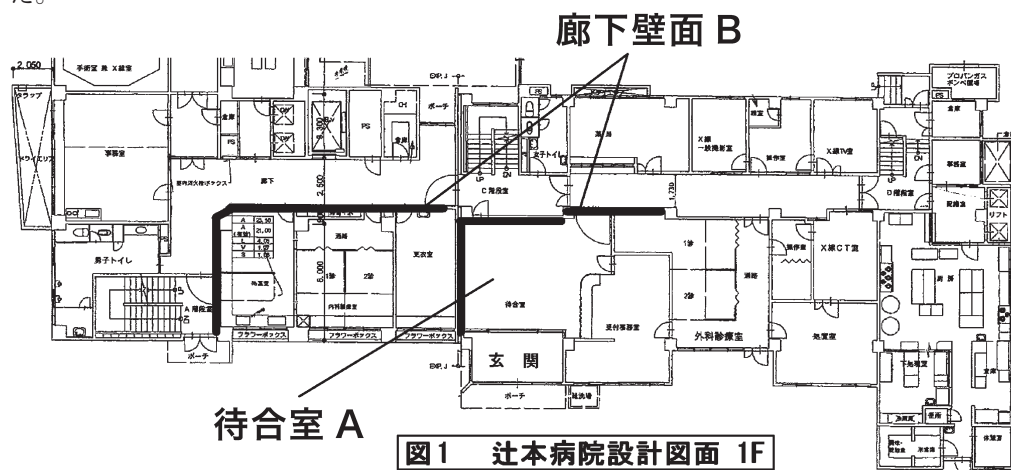
## 4-2. 辻本病院

辻本病院の依頼を受け、まず現場の視察を行い、院内の「動線」を調べるようになった。1階の玄関を入ると受付と広い待合室が在り、待合室を抜けて廊下に出ると、その廊下の左右の先に内科診察室と外科診察室が在った。

調査の結果、まず、1階待合室に壁画を制作することが決定し、病院側から提出された建築図面を基に実際に描画する壁面の縦、横の寸法を算出し、縮小版を作った。その縮小版にプロジェクトに参加した美術学科・大学院生たちが下図を描くことになった。通常、自己完結を目的として絵画制作を行う彼らにとっては、差し出された展示場や他者の感情を思い計りながら、自己を表現するという条件の難題に出会うことになった。



写真9) 辻本病院の関係者との打ち合わせ  
辻本病院常務と大学院生との第1回打ち合せ



太線部分に描画作業を行った



そして、大学院生各人が思い思いのテーマで作画した「下図」を病院側に提示して、病院関係者（事務長・看護師長・数名の医療スタッフ・事務担当者）と打合せを行い（写真9）、それぞれが率直な意見を交換した。病院側からは、自然を題材にしたものや色調の穏やかなもの、心優しい雰囲気なものなどに対して評価や要望が高かった。

そこで、壁画を制作する待合室（図1-A）を、外来患者がまず足を踏み入れる場所であることや、来訪者の年齢や性別に関わらず、その空間に足を踏み入れた時に「心地の良い場」となること、また、受診を待つ間にも「安らぎの場」となることなどを考慮した。そして、大阪狭山市の市民や地域の人びとにとって「和みの場」となるように、地域のラウンドマークである二上山を取り入れ、柔らかな色調で風物を描くことに纏まっていった。そして「下図」に手直しが加わるたびに、制作側と病院側との間に感覚的・感情的に齟齬が生じないように、その形態や色調、表出するイメージ、テーマ性などの確認を重ねた。また、待合室の裏面となる診察室へ続く廊下の壁面も（図1-B）診察室に向かう患者の不安な気持ちを和らげるためにファンタジックな動・植物を描くことになった。

ようやくにして合意を得た「下図」を、既存の待合室の壁面（L字型 10.2m）に2016年2月下旬より描画することから作業を開始することとなった（写真10、11）。

描画作業は待合室の壁面に直接描くことになり、大学院生5名（小池美貴、竹内茉利、宮川みさき、菊池涼那、東純子）がローテーションを組み、昼の休診時間や休診日を利用して描画作業を行った。また、集中して作業に取り組めるようにと病院側の配慮から部



写真10) 1階・待合室の描画作業-1  
下絵をプロジェクターで壁面に投影して転写する作業



写真11) 1階・待合室の描画作業-2  
主題となる大樹を描き始める



写真12) 1階・待合室の壁画  
大阪狭山市から二上山をのぞむ光景を描く



写真13) 1階・待合室の壁画  
大阪狭山市を夢の街角に見立てた光景

屋1室の提供があり、夜間にも作業を行った。大学の春季休暇中、大学院生達は大学での各自分の制作と並行して辻本病院通いの連日であった（写真12、13）。

次に、その待合室の壁画の裏面となる廊下部分（36.6㎡）には、動・植物を題材にしたファンタジックな光景を描画していった（写真14、15）。

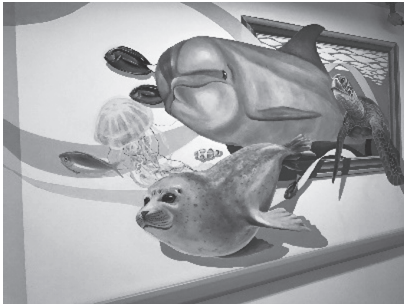


写真14) 内科側廊下壁画

海の中を泳ぐイルカやアザラシ、亀などの生物をトリックアートの手法を使って躍動感豊かに表現した。



写真15) 外科側廊下壁画

動物たちの語らいをテーマに、心温まる交友を表現した。

例えば、海の生物をダイナミックにトリックアートの手法で描いた画（写真14）や、様々な動物や植物を配して変化に富む色調や形態で構成した画（写真15）を、閉鎖的で無機質な廊下に配置した。これらの画面が来院者たちの視線に、明るく映るように演出して、内科診察室や外科診察室、処置室などに導くよう計画した。

さらに第二期（2016年6月～2017年4月まで）の作業として、2・3・4階の入院ブースの廊下の壁面に取りかかることになった。その各階には重篤な高齢患者も受け入れる療養施設もあるために、廊下には数台の車椅子や点滴用の支柱、移動式のベッドなどの諸用具が置かれている。そのために片側の壁が全てと言っていいほど塞がれ、日々の医療行為の大変さを窺わせる。聞き取り調査から、これらの機材の移動は難しいということであった。

そこで、壁面の上部のみ限定した展示計画を練ることになった。壁上部に目の高さ（1.5 m）を基準線にして、その上下に門の字型のレールを1本ずつ設置して、そのレールの溝に1枚がタテ・ヨコ 45cm×45cm角の作品をはめ込む展示方法を提案した。この方法で



写真16) 2階廊下の作品展示

レールの溝を利用した作品列  
これらは廊下の展示なので付き添いの  
方や見舞い客の目にとまる。



写真17) 3階廊下の作品

上手一辺倒の作品だけではなく、様々な  
レベルやテーマの作品で構成した。

あればタテ 45cmの正方形や長方形の作品が容易に展示できることになる。正方形の作品の場合であれば 80 枚の作品の展示が可能であり、これらの作品は、病院側の意向で随意に嵌め替えることができることや、告知ボードとしても使うことが可能であるなど、さまざまな展示や利用方法を提案をした。その結果として、ホスピタルアートに賛同した本学の学生や大学院生、副手、卒業生、そして地域の作家など多方面からの作品提供を得て、現在 80 枚の作品の完成に至った（写真 16、17）。

## 5. 学生への指導と支援について

両病院への取り組み（堺市立病院・辻本病院）は共に、担当教員が中心となり学内に呼びかけて参加希望者を募った。その参加者のうち、美術学科の学生は描画の基礎的な知識や技術を持つ絵画専攻の学生が集まった。しかし、初等芸術教育学科の学生は専門的な描画技術を修得している者が少なく、これまでの経験から絵を描くことが好きな学生が参加した。

企画・構成は学生たちが主体となり、病院の要望や展示スペースを考慮した話し合いを重ねて、下図から実作品の完成へと繋いでいった。材料や用・道具等は副手や教員が中心となって揃え、作業場所については本学構内の教室や空きスペースを利用した。また、その参加学生への支援や病院との事務的な進捗は、主に当時、初等芸術教育学科専任教員であった末延國康元教授が担当し、車谷哲明教授、金田恵美子准教授の 2 名が補佐した、さらに担当した教員のそれぞれが、自身の専門分野の立場から学生への指導・援助を努めた。

## 6. 壁面からの発展

前述した辻本病院では、壁画や 45cm角の作品の制作依頼やその収集と展示を行った。また、それらの作業と並行して新たな取り組みが行われた。

それは、院内に常設の「美術館」の設置を計画・実施したことである。7 階建て病院棟の 5 階部分にある既存の患者用食堂兼談話室の入り口部分を改修し（写真 18）、その廊下にもサイ



写真 18) 美術館入口



写真 19) 美術館の案内ディスプレイ

ンボードを配し（写真19）、病院の一角がホスピタルアートセンターとなる「美術館」に生まれ変わった。美術館内の西側窓面はそのままに、入り口から左右の壁面を絵画の展示スペースとして利用した。また病院内であるために、不特定多数の入館者を対象とする一般の美術館とは異なり、入館者は入院中の患者やその家族、病院職員に限られる。そのために、美術館・館長を病院役員が務め、その運営責任者となった。展示作品は常設を基本とし、半年毎に入れ替えて展示する計画が纏まった。また展示作品は、地域で活躍する作家や小学生たちの作品に加えて、病院所有の絵画作品とした（写真20、21）。



写真 20) 美術館内部



写真 21) 児童作品

作家たちによる日本画や油絵等の作品は美術館内の雰囲気を引き締め、一方で、子供たちによる作品も館内に自由とのびのびさを与え、いずれもが鑑賞者の気持ちを大いに和らげるものが展示された。大人や子供、障がい者などの作品が同じ空間に混在する様子は、一見すると違和感を憶える。しかし、しばらく館内でいると、作品群のそれぞれの個性がぶつかり合うことなく、その存在を示していることに気づかされる。

これまでの既在の病院にはなかった「院内美術館」が、1階待合室や廊下の壁面から、2・3・4階の入院スペースの廊下に続く5階の「美術館」へと繋がり、院内における心の癒しや安息の空間になっていった。

また、「わたしの美術館」の開館を記念して定期的な講座や催しが開催されることになり（2016年12月～2017年6月迄）、講演会や落語会、ミニコンサートなど多彩な企画も実施され、入院中の患者や家族、職員などが一緒に集うことになった。

## 7. 取り組みを終えて

今回の2件の実践は、地域にある病院からの依頼であった。その目的は病院内の雰囲気を変え、また通院や入院している患者の気持ちを和らげたいといったことが主なものである。それは、白で統一された無機質なイメージを病院自らがアートの力を借りて変わろうとしていることである。例えば、待合室を「癒しの空間」に変え、廊下を動きのある躍動的な動線



に変えることによって、「痛み」や「苦痛」を伴う医療現場に、視覚的な「和らぎ」を与えることを意図したものである。

また今回の実践は、病院からの提案を受けて、学生がコンセプトを考え設置していく、というプロセスに双方の利点を生み出したと捉えることができる。つまり病院職員の環境・空間への意識を高め、参加学生たちが鑑賞者を知るなどと、多くの点からも、この2件のアート制作は意義のあることになった、と考えられる。

とくに、参加学生にとっては、病院の中に「心の癒し」や「安らぎ」につながる絵画表現を行うことによって、これまで学んできた自己完結の表現とは異なる、社会貢献に似た意味を持つことを実感したであろう。卒業後、いずれどこかの社会に属さなければならない学生たちにとって、「社会」を感じることが出来たひとつの機会であったことも言うまでもない。その体験を通して医療や福祉に対する見識も広まってくれたらと願うところである。

そして、何よりも本学学生の実践が地域の病院に形として残ることは、「大学での学び」を社会に生かす試みであり、このような活動の機会を与えていただいた本学事務局や堺市立病院及び辻本病院の両院事務局に、担当教員一同で大いに謝意を表すところである。

また描画制作の現場で御協力いただいた医療関係者にも御礼を申しあげるとともに、それら医師や看護師の方々から、この取り組みにどのような感想や思いを持っておられるのか、事後調査を行い、その結果などを参考にして、今後も病院とアートの関わり方について、さらなる研鑽を重ねたいと願っている。

## 【註】

- 1) 堺市立病院。2015年7月に西区に移転。現在は救急救命設備を備えた「堺市立総合医療センター」に改称された。

